

自分のために

咲きましよう

ここに興味深い調査結果があります。

アメリカはハーバード大学の研究調査によると、「心から理解し合える仲間が一人増えるごとに、幸せになる可能性は約9%ずつ高まり、十二人理解し合える仲間がいれば、ほぼ100%幸福になる可能性が高い」という事が分かったそうです。

また、「生活が不幸だと感じられる友人が1人増えるごとに、幸せでいられる可能性は7%ずつ低下する」と、報告されています。ということは、十五人不幸な友人がいれば、ほぼ100%自分は不幸になる可能性が高いということになります。

さあ、皆さまの周りには、どちらの種類の友人が多いでしょうか？

「類は友を呼ぶ」とも言います。気の合った者同士は、類を以て自然に集まるという真理を、自分の身に引き寄せて真摯に受け止めて考えてみると、全ては自分自身の問題であることが見えてきます。「他人(目の前の相手)は自分を映し出す鏡である」とはアランの言葉です。自分自身が全身を確認するためには、大きな等身大の鏡に自分自身を映し出す

ことが必要です。鏡に映し出された自分を見つめながら身なりを整えます。女性は鏡台に映った自分の顔を見ながらお化粧をします。ただ、自分で自分の姿や態度の一部始終を直に自分で確かめることは出来ません。鏡に映っている自分も左右が真逆に映し出されています。そこで本当の私自身を知っているのは、周囲にいる目の前の相手(人)です。私達は本当の自分を知る為には、本当の自分自身を映し出してくれる等身大の鏡が必要となります。それは何か？それが周囲にいる目の前の相手(人)ということになります。周囲にいる目の前の相手は、自分の何を映し出すのでしょうか？容姿や身なりでしょうか？それもあります。それもありませんが、周囲の人が映し出す鏡はもつと凄いです。なんと、自分の人柄や、目には見えない内面性の部分を如実に映し出してくれます。「類は友を呼ぶ」と言います。周囲にいる人達は、感謝を口にしながら自分の本分を全うして、毎日を一所懸命に生活している人達でしょうか？それとも不平不満ばかりを口にしている、いわゆる不幸な人達でしょうか？その人達が「私自身(自分を映し出す鏡である)」ということなのです。不平不満の人達が多い自分は、実は自分自身も不平不満を口にしているということになるでしょうね。また感謝を口にする人達が多ければ、自分も感謝を口にする

部類の人間だと考えて間違いないと思います。自分が付き合っている人達を冷静に見つめてみましょう。人生は一度きりです。不平不満を口にする人が多ければ、自分自身を見つめ直すチャンスです。感謝を口にする人が多い場合は、その人達を大切にできる自分でありたいものですね。

さあ、今年も四分の三が終わりました。十月は過ぎやすい季節です。「○○の秋」と言いますね。あなたは、この「○○」に何を入れましょうか？自分らしく人生を謳歌するために、この「○○」を充実させた時を刻んでいきたいものです。人生は成長だと思えます。周囲に流されることなく、シツカリと自分の足元を見つめ、一步一步成長の時を悔いなく過ごして頂ければ幸いです。

●【変わりゆくもの】

『本来の面目(めんもく)』と題した詩があります。『春は花・夏ほととぎす・秋は月・冬雪さえて冷(すず)しかりけり(道元禪師)』と。つまり、人が本来持っている、人としての心の本質のことです。「本来」は初めから変わらずある状態のこと。つまり不変のもの。「面目」は容姿のことです。つまり変わりゆくものです。

私達が生きていく世界には、常に変わっていくものと、変わらない不変的なものがあり、この短い詩の中にその対比がクッキリと表現されています。私達は必死になつて地位や名譽、財力などを求めようとしますが、同時に心の深い部分ではその儂さをよく知っています。そういうものは永続しません。いつかは必ず消えていくと知つていながら、なおそれを求めようとします。私達は誰もそういう一面を持っています。一方で、大自然の運行や秩序はどんなに時代が移ろうが変わる事はありません。朝が来れば夜がおとずれますし、日本のような温帯地域では春夏秋冬の四季が常に巡つてきて、四季折々の草花や食べ物を楽しむ事ができますよ。太陽の光は無限に降り注ぎ、生きる上で必要な水も空気も皆平等に、そして無条件に与えられています。

物事が様々に移り変わる儂い人生の中にあつても、それを慈しみ、深く包み込む大自然の秩序は常に完全であり、調和そのものといえるでしょう。

●【やがて大輪の花が咲く】

「桜」は咲いている時だけが「桜」なのではありません。桜の木は、植えてもらった所にじっと立っています。夏は、お日さまがカンカンに照って暑いけど、動かないで太陽に向かって、新しい枝を出し

たり、幹を太くしたりしています。秋になつて葉っぱを散らして、それを養分にします。寒い冬には、その養分を十分に吸うて、暖かい地べたの中で新しい根を作つたり、根を太くしたりするのが桜の355日間の仕事なのです。「桜」は自ら綺麗な花を咲かそうと思つてコツコツ準備をしているのです。

それでようやく春になり「皆さん見て下さい。一年間頑張つてきましたから、今年もこんなに綺麗に花が咲きましたよ」と、誇らしげに十日間咲くのです。花が散つたら、また来年の準備です。花の咲いている良いところの十日間だけを見て、「桜はいいなあ」と言っていたら、本当の事が見えなくなつてしまいます。

これは私達も同じです。他人の良いところだけを見て、「ああ、あの人はいいなあ」と思うのと一緒です。人に好かれて格好良い人気者も、それまで黙つて他人の見えないところで一所懸命に苦労しているということだろうと思います。誰しもみんな、綺麗な自分の花を咲かそうと思つて、人知れず、じつと辛抱しながら精進しているのです。

白鳥なんかもそうです。池で気持ち良さそうにスイスイと泳いでいる様に見えるけれど、見えない水の下で一所懸命に蹼（みづかき）で漕いでいます。そし

て、餌になるものをキョロキョロと必死になつて探しているんですよ。そばで見ていると優雅に泳いでいて楽しそうに見えるすよね。やはり私達人間も同じです。普通の人は、他人の良いところだけが目に付きます。人の見えない苦労が、なかなか分かるものではありません。

努力もしないで勝手に良くなつたり、楽して良くなつたりということは絶対にあり得ないことです。桜の花も白鳥も、自分出来る与えられた努力を一所懸命行つていくという点において、みんな一緒なのです。

つまり私達は、他人の表面的なカッコイイ良いところだけ見ていたらいけません。見えないところで頑張つていたり、辛抱していたり、努力している、そんな見えない陰の部分こそ観える自分になりたいものです。

仏教の考えでは、自己本位の物の見方を転じて、相手の心と一つになった物の見方をするように教えています。仏教では知識だけで全てを判つたと思うこと、一部分を知つて全てを知つていようと主張することを「一枚ざとり」とも言います。そんな一枚ざとりで分かつたようなことを言つてはいけません。自分を戒めなければなりません。諺にも「隣の芝生は青い」。『隣の牡丹餅は大きく見える』などがあるように、他人の

ものは、何かにつけよく見えてしまうものです。「うちの鯛(たい)より隣の鯛(いわし)」とまで言われるくらいですからね。誰でも順風があれば、辛い時もあります。辛い時にはじつと辛抱するんです。そして、できるだけ根を生やし、雪解け水や土の中の養分を沢山吸収して、グツと辛抱しましょう。いつか雪が解けたら、しつかり吸収したその養分で、自分らしい花を咲かせた良いのです。根っこ、つまり理念さえ腐らなければ必ず花は咲きます。

「損得・勘定」という自我の「ものさし」を捨てて、「尊徳・感情」という真心の「ものさし」を目指しましょう。下へ下へと根を伸ばし、張り巡らせるタイミングというのはまさに、先行き見えない困難な日々の中にあるのだらうと思います。『花咲かぬ冬の日には下へ下へと根を生やせ』。下へ下へと生やした根っこを、腐らない様にすることも大事です。「何も咲かない寒い日は下へと根を伸ばせ。やがて大きな花が咲く」。



【ご案内】

ユーチューブ (YouTube) 『寛敬の部屋』を配信中です。

左記のQRコードからも入れます。



YouTube 寛敬の部屋

YouTube 寛敬の部屋

YouTube 寛敬の部屋

YouTube 寛敬の部屋

『チャンネル登録』や『いいね』もいただけると思います。
また皆さまから届いたリクエストや質問などにも、お答えしていきます。
ユーチューブチャンネル

『寛敬の部屋』

ご視聴よろしくお願ひします。

会 長 副住職 谷川寛敬